

2016年公開ピンク映画「めぐる快感／あの日の私とエッチして」脚本

山崎浩治

1 王比伊神社境内(再現ドラマ風)

神社でお百度参りをしている女(片桐彩香)。

凜香の声「上野と横浜にある王比伊神社でお百度踏むと玉の輿結婚できるんだって。ネットで評判になってるのよ！」

参道を戻ってくると、そこに花束を抱えたリッチマン風の男(大森修平)が待っていた。

片膝をついて指輪を差し出す男。

女が狂喜して男の胸に飛び込んだ。

2 「大蔵大学都市伝説研究部」部室

片桐彩香・凜香姉妹、修平、川島司(学生帽に黒縁メガネ、学生服姿のダサダサの格好)がいる。

川 島「王比伊神社は玉の輿結婚した芸能人の多くが通ってたと言われてるんだよね」

凜 香「ここで願い事を書いた絵馬を写メで撮って待ち受け画面にすると、願い事が叶うっていう都市伝説もあったわ」

凜香が差し出したスマホの待ち受け画面に「玉の輿に乗れますように」と書かれた絵馬が写っている。

彩 香「凜香はいつも玉の輿がらみの都市伝説ねえ……」

凜 香「てへへ」

川 島「ドッペルゲンガーはパラレルワールドに存在する、もう一人の自分、っていう都市伝説、知ってる？」

修 平「ドッペルゲンガーを見ると死ぬ、ってのも有名だよな。本来、別世界であるパラレルワールドの住人同士が会うというのは、一方の世界には、もう一人の自分、が存在していない、つまり、死を意味するってことで案外、合理的なんだ」

彩 香「あたしはUFOが実はタイムマシーンで、乗ってるのは未来人だっていう都市伝説、好きだな」

修 平「けどさ、UFOに乗ってるのが未来人なら、どうして過去にいる自分の先祖に大金持ちになる方法とか教えに来ないんだろう。オレなら絶対に教えに行くぜ」

彩 香「大金持ちになる方法を教えるだけならタイムマシーンなんて必要ないじゃん。メールがある時代だったら、未来からメール送ればいいんだし」

修 平「(目を輝かせ)メールのデータなら質量ゼロだし、光以上の速度でメールを送ることができれば理論上、時空を超えるのは可能だよな！」

彩 香「昔使ってたメアドに送れば届くんじゃない？」

修 平「それは合理的な考え方だ！」

修平が手帳を取り出し、何やら難しい数式を書き出す。

川 島「(苦笑して)修平の発明オタクがまた始まったよ」

修平「都市伝説には発明のアイデアがごろごろ転がってる。オレはそのアイデアを商品化して将来、IT企業の社長になるんだよ！」

彩香「(修平を嬉しそうに見つめて)……」

凜香「修平君がIT社長になったら、姉貴は将来、玉の輿じゃん？」

彩香「(夢見る眼差しで)そうなるといいけどなあ、えへ」

### 3 片桐姉妹のマンション・玄関(三年後)

表札に「片桐彩香・凜香」とある。

### 4 リビング

彩香「ただいま！」

OL姿の彩香が入ってくると、所帯臭い格好で寝転がった修平が熱心にスマホを触っていた。

修平「お帰り、彩香。お勤め、ご苦労さん！」

彩香「今日も一日ゴロゴロしてたの、修平？ スマホ触ってるヒマあったらシューカツしてよ！」

修平「オレって社長の器なんだよなあ。IT企業立ち上げようと日々奔走してんのだよ、これでも」

彩香「引きこもりの発明オタクのくせに！ ねえ修平、彼女の部屋に何年も居候して恥ずかしくないの。大学卒業以来、ずっと面倒見て来たあたしはもう限界なんですけど！」

修平「(上の空でスマホを操作して)ごめん、いま忙し……」

彩香「修平ってば、聞いているの！ 一体何してんのよ！」

修平「`昔のメアドにメール送ると、過去の自分にメールが届く、って都市伝説聞いたことない？」

彩香「知らないわよ、そんなの」

修平「昔、彩香から聞いた気がするんだけどなあ」

彩香「その都市伝説がどうしたのよ」

修平「昔のオレのメアドにメール送ってんの。宝くじの当選番号とか競馬の当たり馬券、教えてやろうと思ってさ。会社立ち上げるための地道な開業資金作り」

彩香「ハイ、君、浅はか選手権東日本代表決定！ 過去の自分に宝くじの当選番号教えたら働く必要ないしょうが！」

修平「それでも世のため人のために働きたいと思うのがこのオレなわけさ！」

彩香「だったら、バイトでもして地道に働けっつ～の！」

そこへ凜香と川島(びしっとスーツを決めたエリート風)が入ってきた。

凜香「お帰り、姉貴。またケンカしてんの？」

彩香「(川島に気付き)あっ川島クン、来てたんだ。二人してお出掛け？」

川島「結婚式場の打ち合わせ」

修平「そっかー、おまえら、いよいよ来月結婚式だもんな」

凜香「ツカサは昔、同じ都市伝説サークルの姉貴にずっと片思いしていたのに、姉貴は気づかなかった。もしも二人が付き合ってたら、凜香たち結婚することなかったよね。ねえツカサ？」

川島「そだね、凜香ちゃん(と凜香と見つめ合って微笑む)」

修平「(しみじみと)ダサダサ大学生だった川島がいまや大企業の社員だもんなあ。セレブじゃないけど、エリートサラリーマンなら満足だろ凜香ちゃん」

凜香「凜香、大学時代からツカサのことマークしてたのよ。この人、成績優秀だったから。ま、それもこれも王比伊神社で何度もお百度踏んだお蔭だけだね」

彩香「ハイハイ、どうせあたしは貧乏くじ選手権全国大会優勝ですよ！」

修平「え〜、もしかして貧乏くじってオレ？」

彩香「当然でしょ、修平のバカ！」

## 5 近所の公園(別の日の夕方)

OL姿の彩香、ブランコに揺られている。

彩香「あんなニート男にハマって、あたし、青春ムダにしちゃったのかな。修平の告白断ったら、違う人生があったかもなあ」

その時、彩香のスマホに着信音が鳴った。

スマホに「過去ポスト」というアプリが届いている。

彩香「過去ポスト？……なんだこのアプリ？」

スマホを操作する彩香。

彩香「(画面を読んで)何何……過去の自分にメールを届けるサービス？ 方法は昔使ってた自分のメアドに送るだけ？ こないだ修平が言ってたやつね。くだらない」

アプリを消去しかけた彩香の指先が止まった。

彩香「ちょい待ち。どうせなら過去のあたしに一応、忠告しておくか。修平と付き合うのはやめておけ、って。日時も指定できるのか……修平に告白された頃のあたしのメアドは確か……」

熱心にスマホにメールを打つ彩香。

彩香「いけ！ 過去のあたしに！(とスマホにタッチ)……なんてね！」

そこへ、ござっぱりした格好の修平がやってきた。

修平「お〜〜い彩香！ こんなところでナニ黄昏れてんだよ！」

彩香「頼りない彼氏のせいで、自分の将来について思い悩んでいたんです……どうしたの、そんな格好して」

修平「SNSを通してオレのアイデアに興味を持ってくれた日系のIT社長がいて、今日会ってきたんだ」

修平が差し出した名刺には「リンゴ社代表取締役 スティーブ・成仏」とある。

彩香「(度肝を抜かれ)世界的なIT企業じゃない！」

修平「オレを開発チームの一員としてスカウトしたい、って！」

彩香「ウッソ〜〜」

修平「とりあえず！IT企業の社長に向けて第一歩かな。彩香にはいろいろ苦勞かけたけど、これからオレ、彩香を幸せにするから！」

彩香のN「修平はあたしを騙したわけじゃない！　あたしたち、あの時、約束したんだ」

## 6 大学のキャンパス近く(回想)

大学生時代の彩香と修平が話している。

修平「『アルプス一万尺』の二番目の歌詞知ってる？（と鼻歌で歌い出す）♪ 昨日見た夢……」

彩香「それ、あたしも知ってる！」

彩香と修平、一緒に歌いながらアルプス一万尺を始める。

彩香・修平「♪昨日見た夢　でっかいちいさい夢だよ　蚤がリュックしょって　富士登山ヘイ！  
ランラララララ、　　ランラララララ　ランラララララ、ランラララララ……」

修平「(ふと真顔になって)蚤がリュックしょって富士山に登るような夢かもしれないけど、オレ、大学卒業したら三　　年間、IT企業の社長目指して頑張ってみるわ。彩香には苦勞かけるかもしれないけど……」

彩香「ううん、頑張って修平！　あたし支えるからね！」

## 7 彩香の部屋(現在)

幸福感の中でセックスしている彩香と修平。

高まっていく彩香。

彩香のN「過去のあたしにあんなメール送っちゃったけど……別にいいよね！」

次の瞬間、世界がぐるぐる回り出した。

×　　×

後背位の体位で喘ぐ彩香。背後の男は顔が見えない。

彩香「ああん、イっちゃう、あ～～(とイク)」

脱力して男の胸に甘える彩香。

川島の声「着替えたら出掛けようか」

男は――川島。

彩香「か、川島くん！（思わず自分の裸体をシーツで隠す）」

川島「懐かしいな、その呼び方……大学時代は僕のこと、そう呼んでたよな」

彩香「ちょ、ちょっと待って。どうして川島くんと……！」

川島「そろそろ結婚式場に打ち合わせに行く時間だよ」

彩香「結婚式場……？(腑に落ちない表情)」

## 8 リビング

着替えた彩香と川島が入っていくと、凜香と修平が口論している。

凜香「ハイ、君、浅はか選手権東日本代表決定！　過去の自分に宝くじの当選番号教えたら、

働く必要ないでしょうが！」

修平「それでも世のため人のために働きたいと思うのがこのオレなわけさ！」

凜香「だったら、バイトでもして地道に働けっつ〜の！」

彩香「(瞠目して)この光景は……！」

修平「(彩香たちに気付き)……川島、どっか行くのか？」

川島「結婚式場の打ち合わせ」

修平「そっかー、おまえら、いよいよ来月結婚式だもんな」

彩香「！」

凜香「(ため息を吐いて)昔、姉貴にフラれて落ち込んでた修平に声をかけたのが凜香たちのなれそめ。もしあの時、こんなダメダメ男に情けをかけなかったら凜香、いまごろ玉の輿に乗ってただろうなあ」

修平「そしてオレをフッタ彩香は、川島と結ばれた。学生のころ、川島が彩香に片思いしてたなんて、まったく知らなかったぜ」

彩香「(アッと息を飲んで)……！」

## 9 彩香のフラッシュバック(彩香の記憶B)

告白する修平を拒絶している彩香(大学時代)。

川島に告白している彩香(大学時代)。

デートしている彩香と川島。

セックスしている彩香と川島などが走馬燈のように。

## 10 もとのリビング

彩香「(茫然として)……これってあたしの記憶？」

凜香「凜香、これから王比伊神社にお百度踏みに行こう！」

修平「んじゃ、オレも行こうかな、願掛けに」

凜香「オマエは来るな、オマエは！ 縁起でもない！」

再び痴話ゲンカを始める凜香と修平。

彩香「あのメールが過去のあたしに届いて、あたしの人生が変わったのね！ よっしゃあ！(とガッツポーズ)」

凜香、修平、川島、呆気にとられて彩香を見つめている。

## 11 キッチン(数日後の昼)

彩香、いそいそと弁当を作っている。

寝起き顔の凜香が入ってきた。

彩香「凜香、会社休んだの？」

凜香「修平が世界的企業の開発チームに就職したのよ。もうハケンなんてやってられないわ。

凜香に言い寄ってくる童貞デブの上司も鬱陶しいし、いい機会だから辞めちゃった。それよか

姉貴、なんで弁当作ってんの？」

彩 香「今日残業で遅くなるってツカサから連絡があったの。だから夜食用のお弁当。あとで会社に届けに行くんだ……」

凜 香「結婚前から愛妻弁当なんて妻の鑑だねえ姉貴！ 凜香も夢にまで見た専業主婦がもうすぐそこに！ これも過去ポストのお陰だわ！」

彩 香「過去ポスト？」

凜 香「彼が開発したアプリ。昔のメアドにメールを送るの。IT社長が気に入ってくれたんだ」

彩 香「あのアプリの開発者は修平だったの！ スゴイじゃん！」

凜 香「つつても単なるゲームだけだね。過去のメアドに送ると`未来はバラ色、とか`未来は最悪、とか返事が返ってくるだけ。要するに、占いアプリよ」

彩 香「(怪訝)……」

## 12 オフィス街(昼下がり)

彩香、お弁当箱を持って足取り軽やかにやってくる。

ベンチに腰掛けてスマホに目を落とす川島が見える。

彩 香「あっ……ツカサ」

川島の方に走りかけた彩香の足が止まった。

OL姿の重森紀子、川島に声をかけている。

彩 香「(反射的に物陰に隠れて)……」

紀 子「呼び出してごめんね、川島君」

川 島「(スマホから顔を上げて)……」

紀 子「とうとう来週だね、結婚式……」

川 島「(眩しそうに紀子を見て)……」

紀 子「おめでとう、って一言いいたくて。会社じゃほら、人目があるから」

川 島「……」

紀 子「それじゃあたし行くね(踵を返す)」

足早に去りかけた紀子の腕をグイと川島がつかんで、抱きしめた。

離れた場所にいる彩香、言葉を失って立ち尽くしている。

## 13 ラブホテルの一室

セックスしている川島と紀子。

× ×

行為の後。

着替えている紀子。

川 島「(重い口を開いて)……紀子」

紀 子「急いで会社に戻らなきゃ、川島君」

川 島「(沈痛に)新入社員の時からいろいろ面倒を見てくれてありがとう。だけど僕、いつまでも彩香を裏切れないんだ。結婚したら紀子とはもう……(言い淀む)」

紀 子「(明るく)分かってる。今日が最後なんですよ」

川 島「(顔を伏せて)……」

紀 子「あたしはバツイチ、子持ちのお局OLよ。でも川島君はこれからどんどん出世していく人。最初から結婚できるなんて思ってなかった。いい思い出をありがとう」

川 島「ごめん、紀子……」

紀 子「本気の恋でも潔く身を引くのが年上女の心意気……さよなら、川島君」  
部屋を去っていく紀子。

川島、手の中のスマホを凝視している。

## 14 路上

涙を流しながら歩いてくる紀子。

川島の声「紀子～～！」

紀子が振り返ると、川島が走ってくるのが見える。

やってきた川島、紀子を抱きしめる。

紀 子「……川島君？」

川 島「紀子と別れることなんて、やっぱりできない。僕、一生後悔したくない……(と紀子を抱きしめる)」

紀 子「(泣き笑いで、川島の背中でガッツポーズ)……」

## 15 リビング(数日後)

彩香、凜香と修平の前で号泣している。

彩 香「なんで……なんで……こうなるのよ？ え～～ん！」

修 平「結婚式直前でドタキャンはないよな、川島のヤツ何考えてんだ……」

凜 香「本当に愛する人が分かった、だって……要するにずっと二股かけてたわけじゃん！」

彩 香「(落ち込んで)……」

凜香と修平、何やら目で会話している。

修 平「(凜香に「言えよ」と合図して)……」

凜 香「(頷いて)こんな時に姉貴には言いにくいんだけどさ、凜香たち、そろそろ結婚しようと思うんだ。開発チームに入った修平、結構順調そうだし」

修 平「凜香ちゃんにもいろいろ苦労かけたしさ。ま、このへんで区切りつけようかって」

凜 香「二人だけの結婚式、姉貴、立ち会ってよ」

修 平「これからは彩香のこと、義姉(おねえ)さんって呼ばせてもらうわ、よろしくな義姉さん、なんちゃってアハハハ」

彩 香「(突然、修平にビンタして)何が結婚よ！ 修平のためにさんざん苦労してきたのは、あたしじゃない！ なのにあたしを差し置いて妹と……！」

凜 香「(制止して)やめてよ姉貴！　いくら結婚ドタキャンされたからって逆ギレしないで！」

修 平「んだよ……彩香は大学時代、オレをフットくせに。誤解招くような言い方すんなよ」

彩 香「そうじゃない！　あの時、あたしが過去の自分にメールを送ったから、現在が変わっちゃったのよ。本当はあたしたちが付き合っていたんだよ！」

修 平「(ドン引きして)おいおい……」

凜 香「(嘲笑して)姉貴、それってパラレルワールドの話？　凜香たち、都市伝説サークルは卒業したのよ！」

彩 香「もういい！（と部屋を飛び出す）」

## 16 公園

ブランコに揺れている彩香。

彩 香「せっかく新しい人生手に入れたと思ったら、あんな二股男につかまって、あたし、青春ムダにしちゃった……ん？」

ブランコを止める彩香。

彩 香「なんかこの光景、思い出すな……そう言えばもう一つの世界で過去ポストのアプリが送られてきたのも、こんな時だった……あ、そうか！」

ブランコから飛び降りる彩香。

彩 香「な～んだ、もう一回、昔のあたしにメール出せばいいだけじゃん！　ツカサなんかと付き合うな、やっぱり修平と付き合え、って。ふふふ」

スマホを取り出し、アプリを探す彩香の顔色がみるみる曇っていく。

彩 香「アプリが消えてる！　削除してないのにどうして！　そっか……あたしがいま川島君と付き合っている世界では過去ポストは送られてこなかったんだ」

## 17 マンション近くの路上(翌日の夕方)

会社帰りの修平、歩いてくると、彩香が立っている。

彩 香「過去ポストのアプリ、頂戴」

## 18 公園

向かい合っている彩香と修平。

彩 香「(自分のスマホを操作して)このアプリ使ったら、昔の自分にメール送れるのよね！」

修 平「んなワケないじゃん。それはただのゲームだよ」

彩 香「でも、あのメールは過去のあたしに届いたのよ！　だから、こうして現在が変わった……」

修 平「(ため息で)またその妄想かよ。どうかしてるぞ彩香」

彩 香「修平は本当に覚えてないの？　あたしと付き合っていた時のことを」

修 平「(面倒臭そうに)……だからア」

彩 香「(一喝して)ちゃんとあたしを見て！」

修平「(ハッとして彩香を凝視する)……」

彩香を真摯に見つめ続ける修平。

彩香「(期待が高まって)……思い出してきた？」

修平「(ぽつんと)オレたちが付き合ってたパラレルワールドがあったらどんなに良かったらうな……オレは昔、本当に彩香のことが好きだったんだ。いや、正直言えばいまでも好きさ、彩香のことが」

彩香「修平……」

修平「(寂しく微笑んで)でもオレはいま、凜香を愛してるんだ(と踵を返す)」

去って行く修平の後ろ姿。

彩香「(切なく見送って)……」

## 19 公園の外

歩く修平、心と足を止めた。

修平「過去ポストを使ったら昔の自分にメールが届いた……？ そんなことあり得るのか？」

手帳を取り出して、何やら数式を書き始める修平。

## 20 凜香の部屋(夜)

凜香と修平、見つめ合っている。

修平「凜香にはこれまでいろいろ苦勞をかけたな。これから幸せにするよ」

凜香「修平が世界的企業に入社できたのは王比伊神社でお百度踏んだのと、この待ち受け画面のお蔭だよ」

凜香が差し出したスマホの待ち受け画面に「修平が出世しますように 凜香」と記された絵馬が写っている。

修平「(凜香にキスして)ありがと、凜香……」

## 21 部屋の外

その光景を覗いている彩香。その悲しげな眼差し。

## 22 王比伊神社の境内(彩香の記憶A・大学時代)

絵馬を手にした彩香と修平、向かい合っている。

修平「願い事を書いた絵馬の画像を待ち受けにすると願い事が叶うんだっただよな」

彩香「修平は絵馬になんて書くの？ やっぱり、IT会社の社長になれますように？」

修平「そんなちっちゃい願い事、書かないよ」

修平、絵馬にマジックペンを走らせ、「彩香とずっと一緒にいられますように」と書く。

修平「オレにはいろんな夢がある。だけど、どんな夢が叶ったにしても彩香と一緒にできなきゃ意味がないんだ」

彩 香「(修平に抱きついて)……修平！」

**23** もとの廊下(現在)

彩香、自分のスマホの待ち受け画面を見る。

「ツカサと幸せな人生を送れますように 彩香」  
と記された絵馬の画像だった。

**24** 王比伊神社の境内(彩香の記憶 B)

神社で向かい合っている彩香と川島(スーツ姿)。

川 島「彩香、僕と結婚してくれないか」

彩 香「いいよ(とニッコリ笑う)」

**25** もとの廊下

悲しげにスマホ画面を見つめる彩香。

彩 香「あたしはこれから二つの記憶を持って生きていかなきゃいけないの……？」

**26** 凜香の部屋

セックスをしている凜香と修平。

**27** もとの廊下

彩香、肩を落としてその場を去る。

**28** 王比伊神社の境内(数日後)

やってくる彩香。

彩 香「あたしは修平との大切な人生を捨ててしまった……」

境内の一角で、かつて自分の書いた絵馬を見つける彩香。

「ツカサと幸せな人生が送れますように 彩香」とある。

その場を離れようとした瞬間、絵馬に新たな文字が浮かび上がってきた。

——あたしは本当にそれでいいの？——

彩 香「……(衝撃で立ち尽くす)」

**29** 王比伊神社の境内(彩香の記憶 B)

神社で向かい合っている彩香と川島(スーツ姿)。

川 島「彩香、僕と結婚してくれないか」

彩 香「いいよ」

彩香、絵馬に「ツカサと幸せな人生を送れますように彩香」と書いて、ニッコリ笑う。

川 島「……本当にそれでいいのかい？」

彩 香「えっ」

川 島「彩香はずっと修平のことが好きだと思ってた」

彩 香「……」

川 島「ゆっくり考えて返事して。僕は答えを急がないから」  
その場から去って行く川島。

彩 香「(しばし考えて、絵馬にマジックペンを走らせる)」

### 30 もとの境内(現在)

——あたしは本当にそれでいいの？ あたしが本当に好きだったのは誰？ 答えて未来のあたし——

絵馬に次々と現れる言葉。

彩 香「(凝視して)……」

### 31 彩香のフラッシュバック(彩香の記憶A)

「アルプス一万尺」に興じている彩香と修平(大学時代)。  
キャンパスで手を繋いでデートする彩香と修平(同)。

パソコンに向かう修平の傍で楽しそうに過ごす彩香(社会人時代)など。

### 32 もとの境内

彩香、その場を駆け出した。

### 33 オフィス街

歩いてくる修平。

着信音があり、スマホを見る。

### 34 リビング

荷造りされた荷物の傍で、凜香がスマホを見つめている。

そこへ彩香が血相を変えて入ってきた。

凜 香「(立ち上がって)凜香ね、彼のところに行くことにした」

彩 香「(ぺたりと腰を下ろして)……修平と暮らすんだね……あたしにはやっぱり邪魔できない……修平と幸せになるんだよ、凜香」

凜 香「凜香、幸せになる……だけど相手は修平じゃないよ！」

彩 香「！」

凜 香「未来の修平は夢を叶えてIT企業の社長になるんだけど、発明に没頭して貧乏暮らしを続けるの。結婚した凜香はずいぶん苦労するんだって」

彩 香「……な、何言い出すのよ？」

凜 香「凜香が派遣で勤めてた会社に、言い寄ってくる上司がいるって言ったでしょ？」

彩 香「……童貞デブの？」

凜 香「そいつがね、いまから一年後、親戚の莫大な遺産を相続して億万長者になるんだって。身近に玉の輿がいたのよ。こうしちゃいけない！」

荷物を抱えた凜香、リビングを飛び出していく。

彩 香「り、凜香！」

そこへ入れ違いで修平がやってきた。

彩 香「修平、凜香を追いかけて！」

修 平「(落ち着いて)彩香、オレにも未来からのメールが届いたよ。いまから十年後、オレは時空を超えるメールアプリの開発に成功するらしい。彩香のお蔭さ」

× ×

インサート(#18)。

彩 香「あのメールは過去のあたしに届いたのよ！ だから、こうして現在が変わった……」

× ×

修 平「彩香の言葉が気になったオレは研究を続け、ようやく完成にこぎ着けたんだ。そして未来のオレは彩香に感謝の気持ちを込めて過去の君にアプリを送った……」

彩 香「だけどあたしはそのアプリを使って、さらに過去の自分にメールを送り、現在が変わってしまった……」

### 35 未来の研究室

パソコンのある修平のデスクに飾られた写真。

修平と彩香のツーショット写真から突如、彩香が消えて、凜香に変化していく。

### 36 もとのリビング

修 平「焦った未来のオレは、彩香と結婚した川島、そしてオレと結婚した凜香ちゃんにも過去ポストを送った。未来の川島も、凜香ちゃんも後悔を抱えて生きていた……だから二人とも過去の自分にメールを送ったんだな、人生を変えろって」

### 37 インサート

ベンチに腰掛けてスマホを見ている川島(#12)。

「未来のオレから」というメールの件名が見える。

× ×

荷造りされた荷物の傍で、凜香がスマホを見つめている(#34)。

「未来の凜香から」というメールの件名が見える。

### 38 王比伊神社の境内

歩いてくる彩香と修平。

彩 香「凄いね修平。時空を超える過去ポストを開発して……」

修平「正直言うとさ、過去ポストを完成できたのは、未来から届いたメールの構造をヒントにしたからなんだよ。これってタイムパラドックスだよな」

彩香「……」

修平「彩香はどうする？ さっき凜香が言ってただろ。未来のオレはやっぱり、貧乏生活が続けるらしい。それでもオレを選ぶかい」

彩香「(絵馬にペンを走らせ)……」

修平「(彩香を見つめ)……」

彩香、絵馬を突き出す。そこにはこう記されている。

——いまを選ぶのは、未来のあたしじゃない。未来のあたしがなんて言おうと、決めるのはいまのあたし。

後悔は未来のあたしがすればいい！ ——

彩香「(修平にキスして)……」

### 39 彩香の部屋

セックスしている彩香と修平。

× ×

行為を終えて、仲睦まじくまどろんでいる彩香と修平。

そこへエアロバイクに乗った男が突然登場した。

修平「な、なんだオマエ？」

男「わしは、おまえじゃ」

見ればエアロバイクの男は白髪老人だが、修平ソックリ。

彩香「修平！ ドッペルゲンガーを見たら死ぬ、って都市伝説があるのよ！」

未来の修平「心配するな。わしはドッペルゲンガーではない。未来のおまえじゃ。ドッペルゲンガーというのはタイムマシンに乗ってきた自分自身、あるいは子孫のことなのじゃ。未来人との出会いが都市伝説に変化していったのじゃな」

修平「なんのために未来のオレが……」

未来の修平「長年連れ添った女房の彩香が、ばあ様になってしまったの。久しぶりに若いころのピチピチした彩香を抱きたくなったんじゃ。さあ彩香、久しぶりにヤラせておくれ」

修平「ざけんなよクソじじい！ そんなしょーもない理由で時間旅行してくんじゃねーよ！」

未来の修平「わしはおまえなんじゃ。いいじゃろ、一回ぐらい」

修平「許すか、タワケ！」

未来の修平「おまえには、ばあ様になった彩香を抱かしてやる。時空を超えたスワッピングじゃ！」

修平「おまえが未来のオレかと思うと、情けなくて涙が出てくるわ！ とっとと未来に帰れ！」

未来の修平「イヤじゃ！ せめて彩香のおっぱいを触るまでは！」

未来の修平が彩香の腕を引っ張ると、負けじと現在の修平も彩香の腕を引っ張る。

彩 香「いや～ん、もう！」

**40** 王比伊神社の境内(未来)

絵馬を見ている白髪の老女の後ろ姿。

そこには「後悔は未来のあたしがすればいい！」と書かれたあの絵馬が飾られている。  
未来の彩香の声「あたしはちっとも後悔してないよ」

おしまい